

資料紹介 「新川宮内少輔盛政伝(わが老の記)」

山村 規子

*キーワード

新川盛政・中庄新川家・堺伝受・小堀正次・沢庵宗彭

はじめに

本紹介は、国文学研究資料館の中庄新川家文書調査の一環であり、先の調査研究報告第三六号の鶴崎裕雄報告、三七号の鶴崎・小高道子・大利直美報告、本号の鶴崎・小高報告と一連のものである。

【新川宮内少輔盛政伝】について】

本書は、新川盛政の生涯を、嫡子盛明が父の死後二七日をすぎて著した伝記である。そこに描かれる盛政の足跡には資料的な裏付けも多く指摘できる。誇張・粉飾が少なく、歴史資料としても信頼できる作品である。

本書は、すでに近藤孝敏氏により、翻刻紹介されている(「中世末・近世初頭の「中庄新川家文書」、『泉佐野研究第九号』二〇〇三年三月(※以下「近」と称す))。外題・内題がなく、近藤氏による紹介以来、その内容から「新川宮内少輔盛政伝」と称されていた。一方、新川家においては本書を「わが老の記」と称していたという(新川家前当主、故新川善清氏

の妹にあたる林晴子氏のご教示による)。新川家の伝承に鑑み、本稿ではこの呼称も並記した。今回、若干の訂正と裏付け資料を加えて改めて翻刻紹介する。なお、本書は、和歌山県立博物館で平成二八年九月から十月まで開催された展示『戦乱の世から太平の世へ―16・17世紀の紀北・泉南地域―』に出品され、同展示の図録(以下「図」と称し、資料番号も付す)に写真が一部掲載されている(図47)。

【新川盛政について】

中庄新川家は、もとは中世末まで三善姓を称する中庄の侍分(土豪・地侍層)であった。江戸後期にまとめられた「三善家系譜」(泉佐野市史編さん委員会監修「新川善清氏所蔵文書目録」番号1-3)(※以下「新」と記す)等によれば、先祖は三善氏(本姓藤原氏)、南北朝初頭の三善盛清である。盛清は勅命で和泉国に攻め入り敗北、南朝廢臣として零落し、紀州に戻って国人として歳月を送ったという。同系図では、盛清の子息清道が中庄に隠棲した後、喜兵衛尉盛道―善兵衛尉道善―三十郎道慶―

盛政と続き、盛政の代になって新川姓に改姓したとされている。

新川盛政は永禄九年(一五六六)〜元和八年(一六二二)九月十九日(五十七歳)。和泉国中庄の侍分(土豪・地侍層)である三善盛喜(当時三二歳)と和泉国瓦屋の佐野川新川家の新川又七娘の間に生まれた。幼名は三十三郎三慶(根来寺時代)。称号・名乗りなどは、三十郎・忠右衛門・宮内少輔(官途)・樵斎南容法眼三圭居士(法名)。貝塚のト半斎了珍の娘と婚姻、織豊期から江戸初期にかけて新川一門とともに中庄新川家の基礎を築いた。

小堀遠州(正二)の父、正次に仕出以、小堀家家臣・代官をつとめる。政治的・社会的な力量のみならず、文化的にも幅広い知識を持った人物で、医学・儒学・禅学を学び、和歌連歌の道をきわめ、古今伝受も受け、南宗寺の沢庵宗彭からも一番の高弟と認められている。盛政の数々の書写や著作、ならびに当時の文化人との広い交友関係を示す貴重な書簡類は、中世末から近世初頭における中庄新川家文書の基盤を形作っている。

【新川盛政の著書・書写本】

著作は「新川盛政駿河下向記」(新1・215・2・219)(慶長一六年一二月)⁽¹⁾、『配数事類』十二卷(元和四年十二月)。和歌作品は、慶長五年「陪八月十五夜月宴歌合和歌」(新1・183)⁽²⁾、「詠八月十五夜月和歌」(新1・181)(元和四年八月十五日)、「詠七夕七首之和歌」(新1・188)、「詠七首之和歌」(新1・175)、「詠二十首和歌」(新1・168)など。連歌作品は、慶長三年「蟻通法楽連歌」(新1・72)⁽²⁾、「正月九日 百韻連歌」(新2・732)(南宗・盛明・三圭の三吟)、慶長十六年二月十一日「和漢聯句」(新1

189)(駿府での和漢聯句)ほか。書写したものは根来寺時代の『法然上人絵伝詞書』(新2・1・13)⁽³⁾、『難波草紙』(内閣文庫蔵204)⁽⁴⁾・86)、一・三十歳代の『論語抄 信巻』(筑波大図書館蔵860 192)(天正十八年十二月)、『古文孝経(抄)一卷』(東洋文庫蔵 一・c・54)(文禄二年三月)、『東山千句』(大阪天満宮蔵 4・21・1)(文禄二年閏九月)、『日本書紀 神代卷』(国会図書館蔵 WA 16・111)(慶長二年六月)などがある。

【新川盛政の生涯】

※年表参照 ※本書に記載のある記事は(伝)と付した

盛政は幼年期からやさしく学問好きで(伝)、十二歳で三善家ゆかりの根来寺⁽⁵⁾に入り(伝)、少年時代はそこで文武両道に励んだ(伝)。当時の紀州は信長・秀吉による紀州征伐の時代であり、盛政も根来勢として参戦し、一番頸を取るなどの働きをみせたが(伝)⁽⁷⁾、根来寺は盛政二十歳の天正十三年三月、羽柴秀吉により焼き滅ぼされてしまう⁽⁸⁾。紀州勢は敗北したが、盛政は秀長に召し出され、本領の中庄で少知を得て(伝)⁽⁹⁾、四年間にわたり出仕する(伝)。このころよりト半斎ら新川一門と連携して、新川家は泉南地方に勢力を伸張する。中庄の土地集積も進み⁽¹⁰⁾、二四歳の時、盛喜・盛政父子・修生院と連名で根来寺大金剛院の名跡を相続する⁽¹¹⁾。秀長出仕当時は足繁く堺に通い、清家(宮廷儒学者清原家の秘書や典籍)を書写している⁽¹²⁾。二五歳、秀長没後は貝塚寺内に戻り、医学・連歌・歌道などの勉学に励む(伝)。ト半斎の娘(後の宗貞)との婚姻もこのころのよう⁽¹³⁾で、二八歳で嫡男盛明が誕生している。当主の地位も二九歳までには父から譲り受け⁽¹⁴⁾、三一歳頃新川家姓に改姓、佐野川新川家を惣領とする新川氏の

一門化をとげる。同年末までには秀長の重臣であった小堀正次に登用される。三二歳の一月、宮内少輔に任官⁽¹⁵⁾、三三歳の二月、宗柳ら堺連衆とともに玉津島神社に参詣、和歌を奉納、当地で連歌会を催し、帰郷後自邸で父(道慶)ら一族も交えて蟻通明神への法楽連歌を張行する⁽²⁾。三五歳の年に関ヶ原の戦いがおこり、東軍として参陣するが、その一ヶ月前の八月十五夜に親子兄弟で歌合を行っている⁽¹⁶⁾。同年十二月、備中国後月郡の代官となり、任地に赴任⁽¹⁷⁾。三七歳の十月には惣領家佐野川の新川正好とともに近江国惣検地で検地下代となる⁽¹⁸⁾。三九歳、主君の小堀正次没、小堀家は長男正一(遠州)が相続。このころ、故郷の貝塚に戻る(伝)。四四歳、堺の南宗寺にいた沢庵宗彭に参禅、一番弟子となり「南容」の道号を与えられる⁽¹⁹⁾。以降、盛政が亡くなるまで学問や連歌・和漢聯句などを通じて交流は続く⁽²⁰⁾。四六歳、駿府に下向し、徳川家康に拝謁、紀行文を記し、当地で和漢聯句もおこなった⁽¹⁾。大坂の陣を境に盛明が当主となっているので、これ以前に隠居したようである(五十歳前後)。五一歳、末子盛好が十二歳で夭折(伝)⁽²¹⁾、悲嘆のあまり、病に伏す。三年目の春、高野山で剃髪(伝)。五三歳の七月頃より一時病で生死の境をさまよい、辞世を詠み、沢庵も画賛を寄せたが、この時は持ち直す。一二月から『配数事類』をまとめはじめ、五五歳の十月までに完成する。孫、盛里もこの年に誕生したが、五七歳の九月、瘡で没する(伝)⁽²²⁾。同年一二月、父賀月道慶も八八歳で没。

【書誌】 資料番号 新112

表紙は緑色染紙。一七・六×二〇・二糎。外題・内題はなし。本文・見返しは薄紙。全六丁、遊紙なし。保存状態は並。虫損があるが、判読への支障はない。各丁は十五行、六丁才のみ一三行。一筆。書き入れは四カ所あり、一カ所のみ異筆とみられる。

【翻刻】

〈凡例〉

- 一 漢字仮名は異体字を除いて底本のままとし、私に読点を付した。
- 一 改行はそのままにした。
- 一 本文左右にある書入れは、該当部分の横に()に入れて記した。
- 一 本文に上書きされている訂正箇所は、もとの文の左にミセケチを打ち、訂正箇所を右に(○)で記した。

一 記述内容に関連した事項は、注に記した。

- 一 注には参考のため、関連の資料を記した。資料の番号については、(新111)等は泉佐野市史編さん委員会監修「新川善清氏所蔵文書目録」の整理番号・掛軸番号、(近1)は、近藤孝敏氏「中世末〜近世初頭の「中庄新川家文書」(『泉佐野研究第九号』二〇〇三年三月)にある史料翻刻番号、(近藝)としたのは、藝能史研究会二〇一四年八月八日例会報告「近世初頭の「小堀家と泉州領代官新川家―中庄新川家の文化的側面を中心に―」のレジユメ、(市史1)としたのは『新

修泉佐野市史〔4〕史料編 古代・中世Ⅰ 中世Ⅰ 六戦国時代後期 織豊期の史料番号、(図1)は、和歌山県立博物館図録『戦乱の世から泰平の世へー16〜17世紀の紀北・泉南地域』(平成一六年九月)図録の資料番号である。他のものは、その都度参考文献名を記しておいた。

わか老⁽²³⁾宮内少輔藤盛⁽¹⁵⁾政、諱ハ三圭と

いひ、号を南容とす、⁽¹⁹⁾いとおさなかりしより

こゝろさしやさしく、文の道心につけ、
あけくれ手ならふ事をことわざと

志給ふ、十とふたつになり給ふ年より、

根来の寺にのほりて、⁽⁵⁾人のましハリ

にも、いとこゝろはやりかにて、あさゆふの

なくさみとて度々筆⁽³⁾をとり、まれ⁽⁴⁾

人などの御かつきとれる折ふしに、一曲

こゑよくうたひつゝ打いてたる拍子、いと

はなやか也、⁽²¹⁾しかハあれと、其ころこゝ

かしこいくさしけかりしかハ、⁽⁶⁾弓馬の道

おろかにていかゝとおもハれけるにや、兵法

の道たりぬる人にちかつき、兵法の事

ともならひきハめつゝ、印可ゆるしまて

「一才

とれり、⁽²⁵⁾かくて五とせはかりありて、國
のみたれいてき、⁽²⁶⁾紀伊・和泉の兵、誠に
いと⁽²⁷⁾いミし、本よりまうけたりし事なれハ、
馬ものゝくまできよらをつくして、

ものゝふとも引くして、いつミの國こゝ
かしこの城郭ともにこまれる、もお／＼

の軍勢にちからをそへ、あまさへ⁽²⁴⁾一城

の主となりて、前関白太閤秀吉公を

引うけたゝかふ事、幾度とかなるに、名

ある侍に目かけ、たかひに名乗つゝ、手

つから鎧とりなをし、しハしたゝかひしに、

勝負きハめかたかりしかハ、鎧なけすて

引くんで、敵を会なふ打とり、其日の

働無比類、殊に一番くひを打とれる事、

諸軍勢目をおとろかす、此とし十八と

なん聞し、⁽²⁹⁾かくて三とせか程のいくさなり

ければ、こゝかしこにての働かそへかたし、

まことに味方の兵ともいハんかたなく、こゝ

ろたけかりしかとも、太閤人数をくハへ

給ふまゝに、多勢に不勢かなひかたきか

ゆへに、味方の兵あまたうたせ、⁽³⁰⁾すてに

此城もかためかたかりしに、あつかひの事

「一ウ

ありて、紀伊の地にしハしか程引しそく、
かくて天下一統となりし後に、此國の
おほえある名字のもの、めしいたされし
まゝに、わか老も前の大和の太守大
納言殿に出て仕へしに、本領なれば
古郷にて少知給ひて、四とせか程の春
秋を送りしに、太守身まかり給し

より、わか老もいつミの國かい塚といふに

「二才

身退て侍る、かくいたつらに月日を送り
候もいかゝと思ひつゝ、猶又道の證あり、
いつれの學の道にか入なんとおもふ中に、
人の天命おはらすして、死におもむく世
におほし、とかく人の命たすけたらん
にしくハあらしとて、志を醫の道にき
さしつゝ、まなひの窓のまへに螢雪の功
をつくせる事、一十余とせ也、醫の
道のこりなくまなひ得しまゝに、物の
命つく事そのかすしるしかたし、又
風雅のことわさしらさるもつたなからん
とて、夢菴の教えある人になる人にたすさハリ
て哥の道・連歌の奥儀ことくく傳
受し、あるハ禪林に入てもろこしの

ことわさまで學ひつゝ、手に巻を捨
す、世をやすく年月を送らんとおもふ

「二ウ

に、又慶長のはしめより世のみたれ出来
にけり、其むかしよりゆへある人の古郷を
あつけ置れしにより、ともに陣をつとめ、
程なくわかかたさまの心のまゝに世しつまり
けり、たのめをける人、備中の國の政うけ

(小堀遠州公ヲ云「異筆書入」)

とりてくたり給ふまゝ、介になりて、かの國に
ゆきて、掟なとうけつき、國のかためとなん成
侍る、此年三十五になんありけると申、

この國に三とせあまり侍ひぬれと、遠

つ田舎に住事うしとおもひつゝ、暇ゆる

さん事をいろく申させれと、さまくおしミ

とくめしを、ひたすらいとまこひて古郷に

かへり、風雅の道をのミにて、春ハ花の本

に日を送り、秋八月のまへになかめあかし、

「三才

ある折ふしにハさるかくの物まねする事

まで、人の心をなくさめんとにや心につけ、

(過年の八月十八日二氏神の宮作をし、かいひの能までつかうまつり、(同筆書入))

誠におもふことなく過し給ふ、さハありとて

も佛の道しらすらんハ、花さきて実な

きかことし、かつハ後の世も心もとなしと

て、先祖より念佛三昧の浄土宗門なり

ければ、⁽⁴⁸⁾浄土の法流五重口傳まで師

に⁽⁴⁹⁾うく、浄土宗門ハ是方便の説なれハ、

ミつから成佛の縁なかるへしとにや、

参禅の望を⁽²⁰⁾⁽³⁸⁾なして、禅門に入て、参

學の道、朝夕の心にかけてつゝ、心の月明

なり、⁽⁵⁰⁾〇かく年月を送れるに、末の子雅樂

頭盛好、不奇短命にして、十二にミてる年、

身まかりければ、⁽²¹⁾手のうちの玉をとら

れたる心ちして、なけきつゝあかしくらし給ふ、

三とせの春になりて、高野の山にの

ほりて、かしらおろして世を捨人のやう

になん、⁽⁵⁰⁾こゝろもたまひ候ふ、此子、文の道

心かけ、おひさきみえていとかし⁽²¹⁾こかりし、

つねに手ならふすゝりのちり打はらひ、

一部の書をかきあつめ給ふ、其書を

名付て配数字類といふ、卷の数⁽⁵¹⁾十二世、

かやうの事人にまみえんも、かつハ人の

わらひにもやならんかとひめをかれしを、

前大徳住山澤菴大和尚、此書ひら

「三ウ

き御らんせん事を度々おほせける

まゝに遊するに、かなハすしてみせまい

らせられけれハ、いく度も⁽⁵²⁾かへし御

らむし給て、かゝる書をいかてひめを

き、人目をはゝかる事あらんやとて、

大和尚御筆をそめ給ひて、此書に御

序をあそハし給ふ、⁽⁵²⁾この書の著作、

まことによのつねのたくひにもあらし

かし、ましてかつ⁽⁵³⁾の著述の書卷

のかす十余卷也、すける道とても

夜るひるのさかひもあらて、学の道

に心をつくせるつもりにやありけん、

すきぬる夏六月下の五日より、わら

ハやミにわつらひ給ふまゝ、いろくすり

をつかうまつりいたハリぬれと、いさゝの

しるしもなし、まことに眼を書に

さらし、諸典のなか、いたらぬかたなく

醫術つくし侍れと、⁽⁵³⁾したひにかよ

ハく成給ふ、かくて世になからふる事

かたかるへしとて、手つから筆をとりて、

實全是夢 夢是全実

五十餘年 寤寐恒一

「四オ

「四ウ

ぬるも又起るもひとつたゝちにて

五十あまりの夢の春秋⁽⁵⁴⁾

われ愚なる心なれと、醫術・儒道の

書、かつ／＼傳へ、ことに哥の道まで傳授

ありしまゝにや、こゝろをこめて、又

色にいたしことに傳し外にあり

いにしへ今の道をわするな⁽⁵⁵⁾

かやうにかゝせ給ふをみて、われもなミた

おさへかね侍る、かくて程もなく心よハく

みえ給へハ、遠つゆかりのものまで涙を

もよほす斗也、今ハの時になりぬれ

と、こゝろにたかふ事なく、子ともうま

こまでにさま／＼の事ともいひきかせ、

よハひ五十七にして、長月中の九日⁽⁵⁶⁾

子の時斗に、ともし火のきえ入やう

にたえ入給ふ、天にあふき地にふし

なけきぬれとも、又一ことものたまハ

す、かなしミのあまりにわれもおなし

道にと思ふに、會者定離のことハリ

なれハ、いけるものゝたれかハのこりとゝ

まり侍らん、世に生あふならひそと、さま

／＼いひきかするまゝ、人にたすけられ

「五才

てやう／＼わか身のやうになんなり

侍る、うき世のならひなりけれハ、とり

おさめつゝ、草の原・野の土となんなり

給ふ、其跡をいてとふらふに、たゝ松ふく

風の音のミ也、世のことハリかくそと思ふ

なれと、わか身ひとつのかなしき秋の空

のやうになん覚え侍る、月日の道に

関守なけれハ、はや二七日になり侍る、

涙をおさへて發句つかうまつり、追善

をおもふ心斗也、

なきか其形見の雨か夕しくれ、と

いひすて、一句つゝつらぬるまゝに、三十

あまり六になりぬる、涙にむせひて

句のよしあしもおもひわきかたけれハ、

筆ををく、ねられぬまゝに、こしかた

の事ともつね／＼の給しを、きゝをき見

及ふ事かきつらねんとて、硯を引よせ

ぬれハ、涙は硯の海となりぬるに、かく

かつ筆をそめ侍る

「五ウ

「六才

【注】

- (1) 慶長十六年一月、二月、駿府に下向し、紀行文「新川盛政駿河下向記」を記す(新1-215、2-219)(国文学研究資料館調査研究報告三六 鶴崎裕雄報告 参照)。
- (2) 慶長三年二月十九日、盛政は宗柳ら堺連中と玉津島明神に参詣の旅に出て一九日・二二日と当地で連歌会を催し、二二日玉津島明神に和歌を奉納して帰り、二三日自邸にて父道慶らとともに蟻通大明神への法楽連歌を興行した(新1-73)(国文学研究資料館調査研究報告三七 大利直美報告 参照)。
- (3) 根来寺修行時代、十六歳に時の書写した『法然上人絵伝詞書』が最初で、巻四五、四八奥書に天正九年六月二十五日「三十郎三慶」の名がある。
- (4) 寺院内の若衆の心得を描いた『難波草紙』(内閣文庫蔵204-86)の扉右下部に「三慶」、十三丁面右下部に「主三十郎盛政」との署名がある。この『難波草紙』は寺の稚児の立場から記され、一部に和讃の形式を含み、「宗祇の短歌」との関連をにわける作品である。寺の悪童と対比させながら、修行を怠らず人脈を大切に育てていく、あるべき理想的な稚児の姿を描いている。学問にはげむ少年期の盛政は、そこでの理想的な稚児像を彷彿とさせる(山村規子・大利直美「難波草紙再考」鶴崎裕雄編『地域文化の歴史を往く』和泉書院二〇一二年 参照)。
- (5) 根来寺修生院は元来新川家の自坊だったと推定される。(「前田太郎兵衛田地売券」(新2-703)・「殿村上田衛門太夫田地売券」(新2-723)(図50)・「根来寺修生院空知行宛行状」(新2-680)(近6)、「根来寺大金剛院名跡讓状・同讓状案」(新2-681・2-663・2-704)(近11・12・参考1)ほか)。なお、(図)の解説では三善家の子弟が入寺した子院を大乘院とするが、正しくは修生院である。
- (6) 盛政が十二歳で根来寺に入寺した天正五年は、信長の雑賀攻めの年であった。二月十六日に和泉の「国中之一揆」が貝塚に船を引き入れて籠城、翌日信長軍先陣に攻撃され、夜中に退いた(「信長公記」(市史53)・顕如上人文案『真宗史料集成3』p1167参照)。三月、雑賀衆が誓紙を出し降伏。佐野城を築き、津田信張と根来寺杉之坊を定番とした(「信長公記」(市史54))。八月、雑賀衆は、三臈を攻める。根来寺は親信長派だった。信長の雑賀攻めについては、太田宏一「天正五年信長の雑賀攻め進軍路」『和歌山県立博物館研究紀要』3、一九八八年 参照。
- (7) 盛政は敵方の一番頸をとった時の戦功により、根来寺から知行があてがわれた。↓「根来寺修生院空知行宛行状」(新2-680)(天正十二年十一月吉日)(近6)(図51)。
- (8) 天正十三年三月二十日、秀吉は岸和田城へ。秀吉方に対し一揆勢は、多くの出城を作り、千石堀、畠中(百姓)、積善寺(根来衆)、沢城(雑賀衆)、佐野に立てこもったが、二十一日千石堀城落城、二十二日積善寺城開城、二十三日沢城開城。佐野城落城。(「貝塚御座所日記」(市史98))。根来寺もこの日破滅する。同年四月十日、秀長

が佐野浦に対し、百姓還住などを命じる禁制を出す（「羽柴秀長禁制」(市史100)）。根来寺放火、粉河寺も降伏。後、秀吉は湯川の館を攻め、畠山貞政らを討ち取る。紀伊太田城を水攻め、四月二十二日落城。これにより、和泉・紀州の反乱は集結する。秀吉は一揆の棟梁を打ち首に、百姓は助命、武器を持つのを禁じる（「羽柴秀吉朱印状」(市史102)）。なお、一揆の後始末として、根来僧が還俗したか否かの証拠に魚を食うように命じ、踏み絵としたという記事もある（「貝塚御座所日記」天正十三年四月一九日条(市史101)）。

(9) 天正十三年の瓦屋惣百姓や三善盛善宛の小堀正次書状により、新川与一(盛政義父)や父が瓦屋や中庄の政所として認められていたことがわかる。↓「小堀正次書状」(瓦屋惣御百姓中宛 閏八月十一日)(願泉寺文書『貝塚市史』三巻 p 67)。なお『貝塚市史』では慶長九年の書状とするが、小堀正次は同年二月末に没している。また、本文中に「政所」「其庄納所」など荘園制度的な中世支配の名残が窺えるところから考えて、羽柴秀吉の紀州攻め直後の天正十三年閏八月の書状と考えられる。↓「小堀正次書状」(中之庄 宮内殿宛 十月四日)(「小堀文書」『大日本史料』12編1冊 p 982)(こちらも発給年は明記されていないが、本文中の「孫次郎」が天正十五年十月の大和国十津川山崎村の検地帳に見える「小新内孫次郎」と同一人物と思われるので、その後さほど離れていない時期で、少なくとも三善盛喜が盛政に当主の地位をゆずる文禄三年八月以前のもので考えられる)。以上、(近藝)資料集解説による。

(10) このころより盛喜らとト半斎らは連携して、泉南地域に新川一門の勢力を伸張する。↓「太五郎田地売券」(新2-706)(天正十六年十一月吉日)(近7)、「二郎五郎田地売券」(新2-717)、(天正十六年十一月吉日)(近8)、「中庄堂主左近二郎田地売券」(新2-720)(天正十六年十二月吉日)(近9)、「中司助大郎田地売券」(新2-705)(天正十六年十二月廿七日)(近10)。盛政二七歳当時には文禄元年八月八日の中庄検地帳で村高の二割の田地を所持している。
(近)付載表二「中庄新川家文書の売券・譲状一覧」(近藝)資料集 参照。

(11) 天正十七年四月二十二日、大金剛院と修生院の連名で名跡を宮内殿(三善盛善)と三十郎殿(盛政)に譲与している。↓「根来寺大金剛院勢算名跡譲状」(新2-704)(近11)(図52)。

(12) 秀長出仕当時、盛政は堺によく通ったようので、古典籍などを書写している。『論語抄 信卷』『古文孝経(抄)』『日本書紀 神代卷』など。書写本参考。(近藝)資料集参照。

(13) 願泉寺文書。(近藝)参照。

(14) 『新修泉佐野市史』7-1-1 参照。

(15) 盛政は慶長二年正月十日の宣旨で宮内少輔に任じられている。↓「後陽成天皇口宣案」(新2-701)(近15)(図54)。

(16) 盛政は慶長五年九月一五日、小堀正次の下で関ヶ原に参陣する。関ヶ原の戦の一ヶ月前に身内六名で歌合をおこなっている。↓「陪八月十五夜月宴歌合和歌」(新1-183)。注(2)参照。

(17) 慶長五年十二月十二日、備中国後月郡の代官となり、任地に赴任。
↓(新2-662)(近17)「小堀正次判物」(太田浩二『テクノクラート
小堀遠州―近江が生んだ才能』淡海文庫二二 サンライズ出版、二
〇〇二年)参照。

(18) 慶長七年九月、盛政は惣領家佐野川新川家の正好とともに近江国志
賀郡の検地に関わっている。検地奉行は小堀正次・小出秀政・片桐且
元。盛政・正好・西村久六が下代(検地役人)。↓「近江国北小松村検
地請状」(新5-58)(近19)。

(19) 「三圭」は沢庵参禅後、沢庵が盛政の徳を称え、孔子の弟子である
南宮括(子容)になぞらえてつけた名である。↓「沢庵宗彭筆南容道
号頌」(新川盛政道号附与状」(新掛軸2)(慶長一四年九月(近
22)。根来寺入寺当時は「三慶」と記していた。

(20) 沢庵との交流は深く、新川家文書には沢庵関係の史料が複数あり、
堺在住時代の沢庵の足跡を示す貴重な文献である。↓注(19)「沢庵
宗彭筆南容道号頌」・「沢庵宗彭筆新川盛政画賛」(新掛軸3)(元
和四年(近27)(図48)・「沢庵宗彭筆新川盛政画賛」(新掛軸
4)(元和六年十月(近30)(図49)・『配数事類』自序(元和八年十
月二四日(近2)他、一緒におこなった連歌や書簡、禅問答のメモ
など、多数が残されている。

(21) 盛好は生まれながらに学を好み、書をよく読み、仁義、孝子、まさ
に盛政の志を継ぐ器だった。↓『配数事類』自序(元和四年十二月
下旬)・同沢庵序(近2)。

(22) 盛政は元和四年六月二十五日より童病(瘧・おこり)を患う。この時
死にかけて辞世を作り、沢庵も讃を描く。しかしここでは一度持ち
直し、実際に亡くなったのはその四年後の元和八年九月九日である。
『配数事類』はその間にまとめあげたものである。↓「新川盛政辞
世」(新1-180)(近28)(元和四年七月九日 南容三圭禅人)・「沢庵宗
彭新川盛政画賛」二軸(注(20)参照)。なお、年は比定できないが、
医薬を尽くした記録もある。↓「某宗右書状」(新17-38)(近32)(こ
の文書を反故利用した裏文書が「新川盛政の覚書手控帳」(慶長一
八〇元和八年作成)で、九条殿泉州七宝滝寺奉納和歌・帚木別注名・
宗祇上句・牡丹花肖柏下句の付けについての聞書・禅問答・伊勢物語
音譜等を記している。(「某宗右書状」については近藤氏教示によ
る)。

(23) 「わが老」とは盛政の嫡子、盛明による父の呼び方である。

(24) 盛政は声もよく謡もうまかったようだが、新川家には謡曲関係の資
料は現存していない。

(25) 盛政が誰を兵法の師としたかについては、不明である。

(26) 入寺五年目、盛政十七歳の天正十年は、六月二日に本能寺の変がお
こった年である。

(27) 天正十年、雑賀では翌日親信長派の鈴木孫一が逃亡、反織田勢が蜂
起し、土橋氏に主導権が替わる。以後、紀州勢と雑賀・根来勢の小
競り合いが絶えずおこり、紀州は不安定な状況であった(「本願寺
文書」・「原本信長記」ほか)。

(28) ここで「あまさへ一城の主となりて」と記されるが、当時盛政は十代である。あるいはいずれかの出城に籠もり参戦したか、それとも本貫の中庄に城塞があったか、詳細不明。

(29) 注(7)参照。十八歳とするが、宛行状には天正一二年十一月吉日とあり、盛政一九歳の年にあたる。

(30) 根来寺破滅の天正十三年は盛政二十歳。注(8)参照。

(31) あつかひの申：「嘸い」とは、講和の仲立ち役のこと。

(32) 秀吉は天正十三年閏白、十四年太政大臣になり豊臣姓を賜る。十八年小田原城の北条氏を滅ぼし、十九年太閤になる(「家忠日記」・「公卿補任」ほか)。

(33) 「前の大和の太守大納言殿」は豊臣秀長。秀長への出仕の資料はこれのみであり、少知がいかなるものかも不明である。ただ、天正十八年十二月書写の『論語抄 信巻』の識語では「三慶」の名を記しており、二二歳まではいまだ根来者としての名を名乗っていたということがわかる。↓筑波大図書館蔵 南至三慶書写『論語抄 信巻』奥書識語(天正十八年十二月)。

(34) この時期、新川家は勢力を伸ばし、盛政も堺に通って古典籍を多く書写している。注(10)～(12)。

(35) 太守、すなわち秀長は天正十八年頃から不調、十九年一月二十二日没(「多門院日記」・「公卿補任」ほか)。盛政二六歳の年である。跡を継いだ秀保も文禄四年に没(「公卿補任」ほか)。領地は秀吉直轄になった和泉国日根郡北部を管轄していた小堀氏が代官になる。

(36) この当時の資料はないが、京都で当時最先端である曲直瀬道三流の医学を学んでいたようで、晩年に岡本玄治に治療をうけたことを示す書簡が複数ある。↓江月宗玩『欠伸稿訳注』芳澤勝弘 p 433「一二」は、盛政が病氣になり同門の岡本玄治により治療され、帰郷

した記事。啓迪庵、即ち曲直瀬玄朔の弟子である岡本玄治(慶長十八年に玄朔から名を継いでいる。『杏緒書屋所蔵医家肖像集』参照)が治療したことがみえる(なお、芳澤氏は注で「樵齋Ⅱ堺の医師」とされているが、樵齋翁は新川盛政のことであり、啓迪庵は当時は玄朔でなく岡本玄治のことである)。また、元和八年以前 四月十五日の「新川九兵衛(盛明)宛 樵齋三圭(盛政) 書状」(新16-75)は、啓迪庵(岡本玄治)へのつけ届け等についての文で、推定元和五年五月頃の書状には、連歌仲間の七条の人が二年かかって玄治にも治せなかったものを、盛政が治療したとある。↓「年月日不明 元和五年五月ごろ書状」(新13-83)。これらにより、盛政は曲直瀬道三流の医学(後世派医学)を学び、医学を修得・習熟していたことが明らかになる。(以上については、近藤氏の教示による)。最晩年の著書である『配数事類』には、医学関係の割合が多く、盛政の関心の度合いがうかがえる。

(37) 新川家には、堺伝授の伝受系図である「伝受次第」や「古今集聞書」など、貴重な古今伝受の資料が残されている。↓「伝受次第」(新1-217)(伝系は 肖柏—宗珀—等惠—宗柳—盛政—盛明—盛里)。
↓「古今集聞書」(新17-150) 国文学研究資料館調査研究報告三七

小高道子翻刻・小高道子「堺伝授における『古今和歌集』講釈―中庄新川家蔵 古今和歌集聞書(仮題)」「中京大学文学界論叢」三六平成二九年三月 参照。また、牡丹花肖柏と宗祇のやりとりの聞書と思われる記述を含んだメモ書き↓「某宗右書状裏文書」(新7・38)(注(22)参照)もある。盛政の連歌への関心はこのころから深まっていったようで、その嚆矢は『東山千句』の書写に見られる(書写本参考)。

(38) ここでの禪は誰を師としたかは不明である。ただ、文禄ごろ書写した書籍は南宗寺にあり、南宗寺の関係者の可能性が考えられる。『配数事類』には、漢学の割合も多い。

(39) 文禄五年秀次切腹、文禄元年朝鮮出兵。慶長元年閏正月、京都大地震。慶長二年朝鮮出兵。慶長三年秀吉没。年表参照。

(40) 故ある人は、中庄新川家の本拠、中庄の領主、すなわち小堀正次のことである。

(41) 盛政も関ヶ原の戦に東軍として参戦。注(16)参照。

(42) 異筆の書き入れで「たのめをける人」のことを「小堀遠州公」としているが、遠州は子の正一であり、間違いである。これは後世の書き入れであり、小堀正次が正しい。

(43) 「たのめをける人」、すなわち小堀正次が「備中の国」奉行に任命されたことに伴い、盛政は備中後月郡の代官(ここにいう「介」として掟書等を携えて任地に赴いた。盛政代官赴任については、注(17)参照。

(44) 主君の小堀正次は慶長九年に没。長男、正一(小堀遠州)に代替わりする。それが帰郷のきっかけとなったようである。

(45) 盛政四五歳の慶長十五年一月〜二月、小堀正一代官として子息盛明・盛好や多賀盛勝など兄弟一族・中庄地下の総力をあげ佐野中庄惣鎮守大宮大明神を再興し、同社本殿に棟札を上げた。↓奈加美神社本殿建立棟札(慶長十五年八月)『泉佐野市内に残る棟札資料』(泉佐野市史資料第一集)『泉佐野市史編さん委員会 一九九八年二月 p 55 ↓「中庄大宮大明神上座証文」(新1・143・包紙1・218)(元和八年十二月十四日)(近31)。

(46) 同筆と思われる書入れ。「かいひ」は「開扉」か。本文に「さるか」の物まねする事まで」とあるので、盛政自身が能を演じたようである。盛政にかかわる能関係の記事・史料は少年期のものとこれのみで、連歌や和歌、医学や儒学に比べて少ない。注(24)参照。

(47) この時期、慶長一六年正月から二月、駿府に下向し、下向記を記している。注(1)参照。

(48) 三善氏は先祖代々浄土宗で、天正年間、浄土宗中本山の高大寺(現大光寺)の開創の折、盛善は私宅を提供し、開基大旦那とされている(宝曆九年八月大光寺本堂建立棟札写『泉佐野市史資料』第一集 p 40)。文禄五年三月一日、盛政は父賀月道慶(盛喜)と大高寺玄普に阿弥陀如来日供を寄進している。↓(新掛軸1)(近14)。根来寺時代に『法然上人絵伝』を書写しているのも、浄土宗門であることを傍証している。

(49) 五重口伝：浄土宗の奥義を伝える行事「五重相伝」は五重の次第をたてて相承し、五通の血脈を伝授するもので、初重から第四重までを書伝、第五重を口伝で行う。最後の秘儀まで受けたという意。(50) 盛好の早世で力を落とし、盛政は三年後、高野山で剃髪したとあるが、剃髪に関する資料はこれのみである。

(51) ここでは「配数字類」とあるが、正しくは『配数事類』が書名である。なお、十二巻という巻数は、盛好の享年にちなむ。↓『配数事類』沢庵序。

(52) 盛政は『配数事類』を公にするつもりはなかったが、沢庵が披見、沢庵自らが序をそえたことは、同書の序に詳しい。↓『配数事類』沢庵序。

(53) 盛政晩年の煩いの治療の際に、自らが医学を学んだ曲直瀬道三流(後世派医学)の医師達(啓迪庵Ⅱ岡本玄治等)とのやりとりがあったことが、書簡からうかがえる。注(36)参照。また、元和八年八月、子息盛明(新川家当主)が、「樵斎(Ⅱ盛政御煩)」に対して、入封(元和五年)間もない紀州徳川家家老安藤帯刀(直次)に依頼し、藩主徳川頼宣の許可を得て、同家に仕えた名医板坂卜齋(二代、天正六年(明暦元年十一月)を派遣してもらったことも判明している(新川九兵衛(盛明)宛 安藤帯刀直次書状(赤松家文書14-98)) (元和八年八月十二日)。(以上については、近藤の教示による)。

(54) 注(22)参照。盛政は元和八年六月二五日より童病になり、薬・医術を尽くすが次第に弱り、辞世の詩・歌をしたため、同九月九日に亡

くなったと、ここでは一連の流れを描いている。しかし元和四年に一度病に陥ったがその時は持ち直し、四年後に再度病に陥り、実際になくなったのは元和八年九月十九日である。辞世「新川盛政辞世」(新1-180) (元和四年七月九日 南容三圭禅人(近28)は元和四年の重篤の際、同七月九日に記したものである。したがって、四年前に用意した辞世を、実際の病没にあたって転用、正式に辞世としたものであった。なお、沢庵は元和四年にも同八年の二度目にも讃を寄せたので、新川家には沢庵讃が二種類存在する(新掛軸3:4)。注(20)参照。

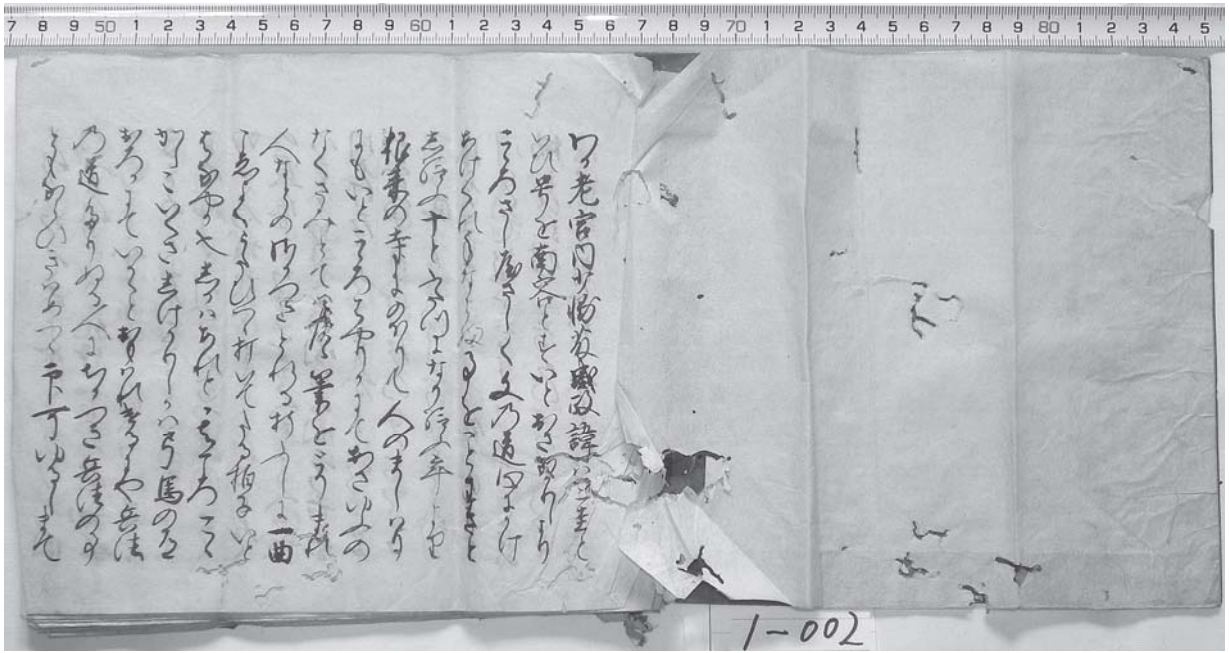
(55) 「われ」は盛明のことである。「色にいたし今道のをわするな」の和歌は、盛政が嫡子盛明に送った暇乞いの歌であろう。なお、「いにしへ今の道」は古今伝受の事をさすか。盛政から古今伝受を受けたのは盛明のみである。盛明自身も和歌や連歌を多く残している。↓「漢和聯句」(新1-216) (元和六年六月二八日) (南宗・三圭との三吟)、「詠七夕七首和歌」(新1-176) (道慶等七名の和歌)、「正月九日百韻連歌」(新2-732) (南宗・盛政との三吟)、「和歌三首」(新2-616-5) (明暦元年以前、独吟)、「詠九月十三夜月和歌」(新6-32)など。

(56) 九月十九日をさす。

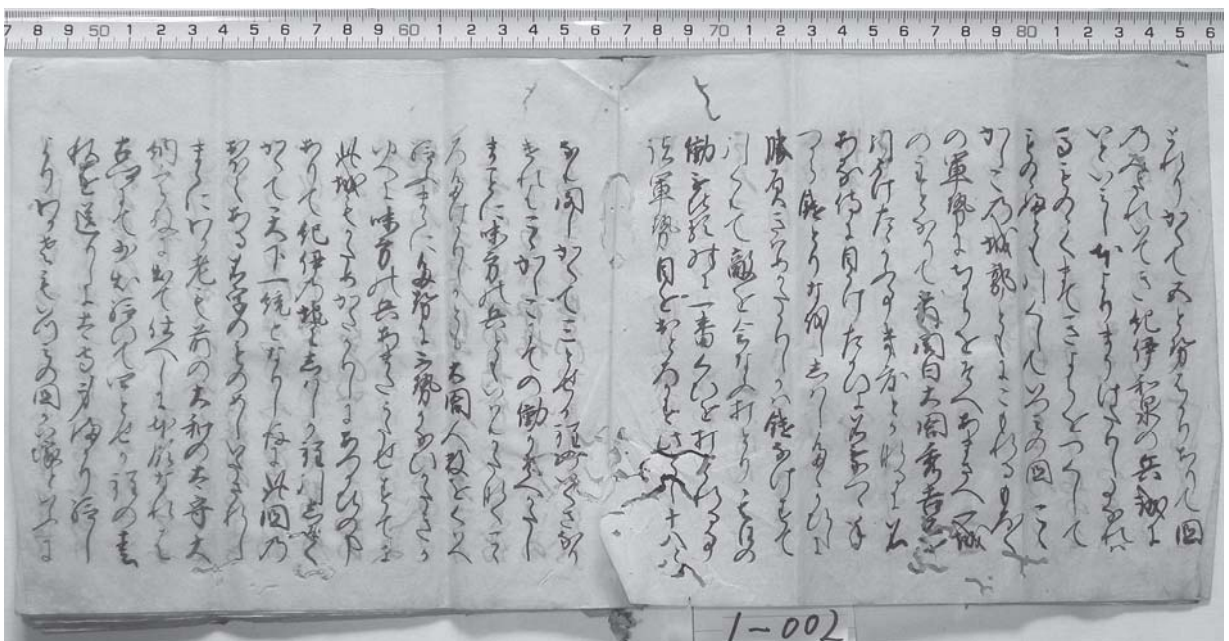
(57) 二七日、すなわち十月三日に追善の歌仙を詠んだとあるが所在不明。独吟のような記述である。

以上、これらの注でみられるように、本書は短いながら資料的に裏付けられる多くの史実を含んでおり、泉南の歴史を辿る上でも貴重な資料といえる。また天正・慶長という大きな節目の時期を生きた人間の一生を鮮やかに伝えている。盛政の深い学識は、最晩年の渾身の作『配数事類』に余すところなくうかがえる。『配数事類』は数字の順を項目にした百科事典（名数辞典）の類であるが、医学・儒学・漢学などの膨大な内容が織り込まれ、この時期の学問の実態を明らかにすることに大いに貢献するものである。

本資料紹介にあたって、貴重な資料の公開をご許可いただいた所蔵者の新川家の皆様、伝承をお教えいただいたご親戚の林様に篤く御礼申し上げます。また、内容については、近藤孝敏氏に全面的にご教示いただきました。深く感謝の意を述べたい。また、ご協力を賜った中庄新川家文書研究会の諸氏にも深謝申し上げます。

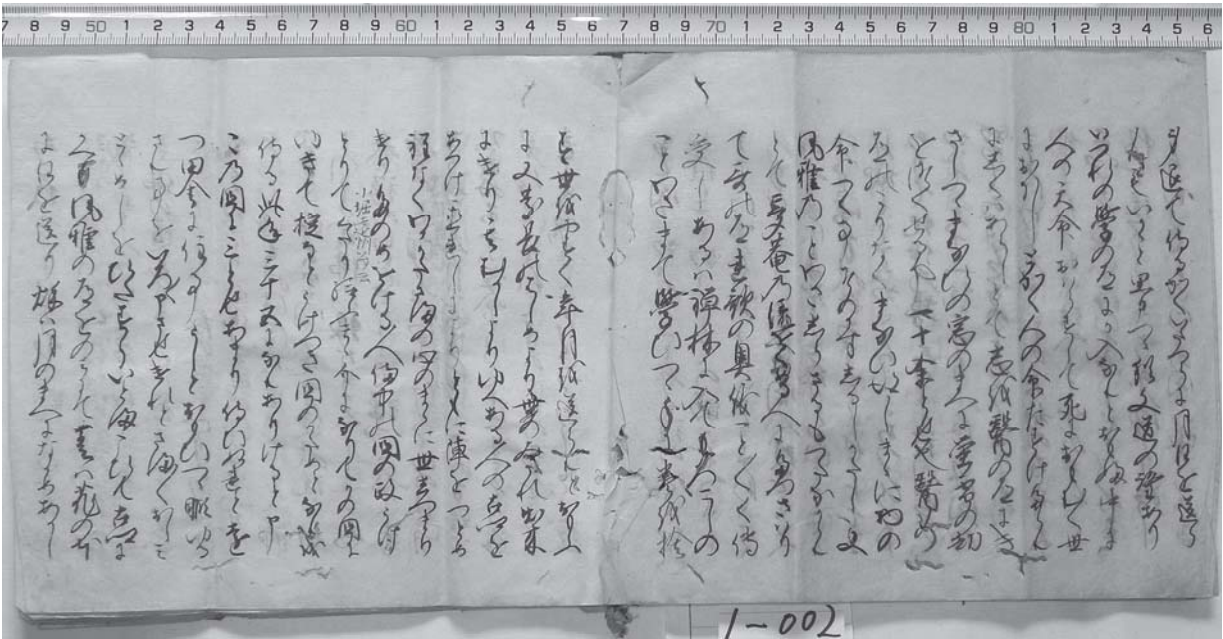


(一オ)



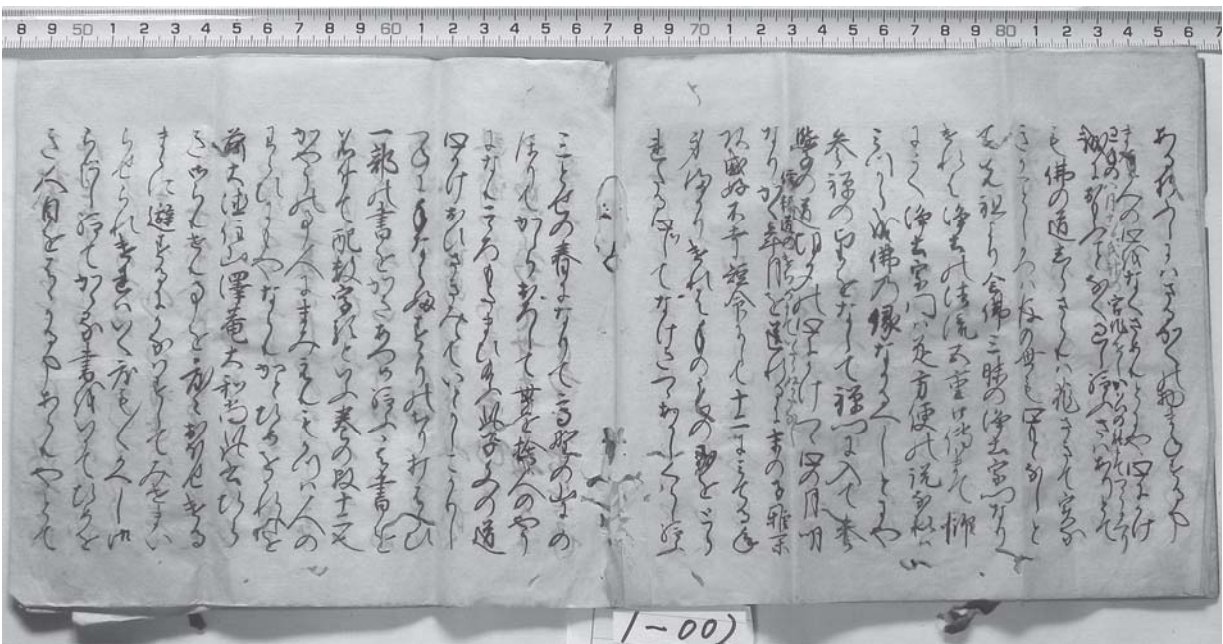
(二オ)

(一ウ)



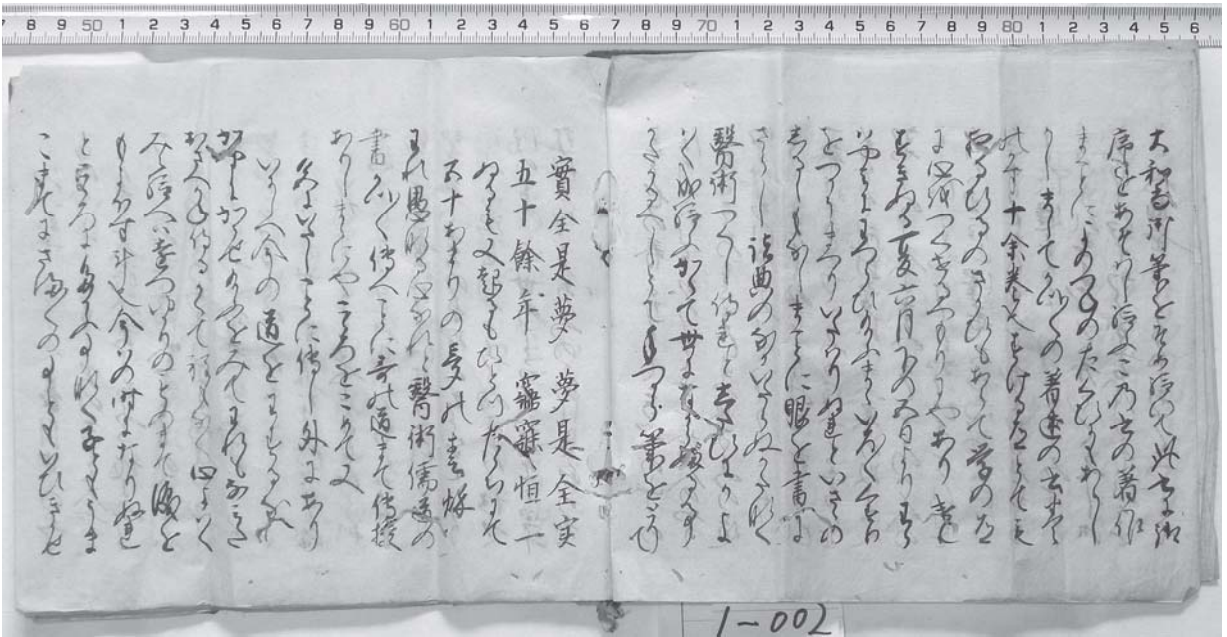
(三オ)

(二ウ)



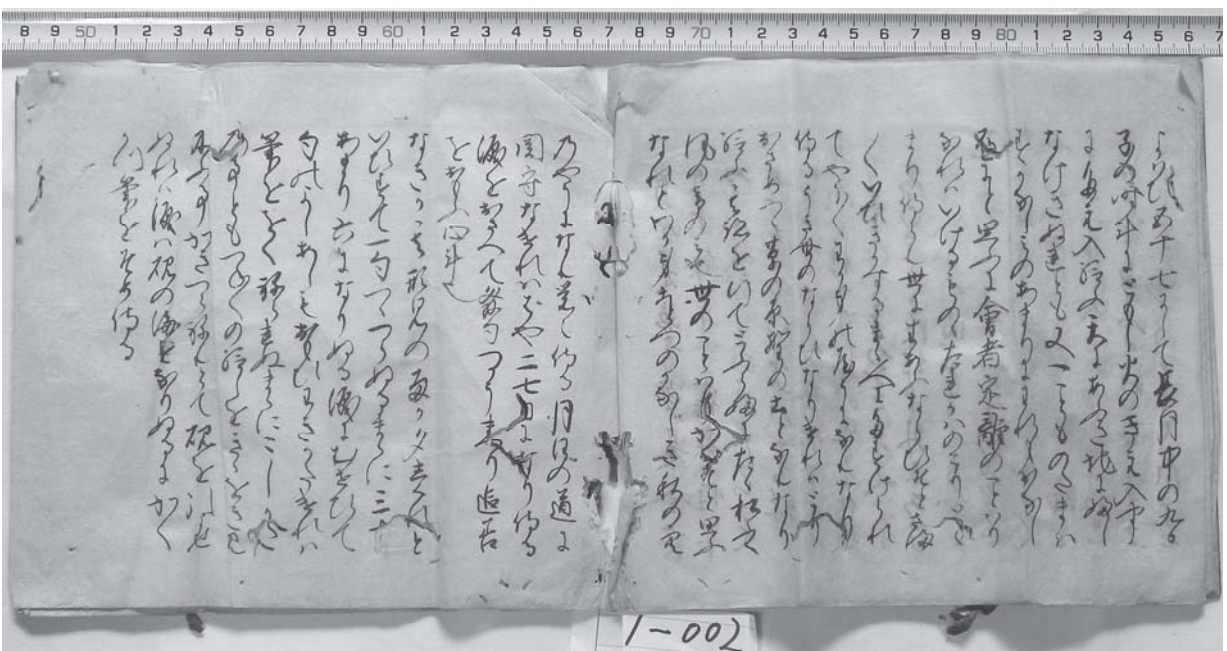
(四オ)

(三ウ)



(五オ)

(四ウ)



(六オ)

(五ウ)

新川盛政 年表

- ※ 本表は、藝能史研究会二〇一四年八月八日例会報告「近世初頭の堀家と泉州領代官新川家一中庄新川家の文化的側面を中心に」のレジュメの表2「新川盛政年表」を元に、加筆補正したものである。
- ※ 年号・西暦のあとに、盛政と盛明の年令を記した。
- ※ 年表のゴシック太字は盛政関連の事項、その他は細字とした。
- ※ 典拠欄の(伝)は本書、(新)は中庄新川家文書、(市史)は『泉佐野市史』、(近藝)は上記報告である。該当典拠史料名は【 】で示し、下に記した。
- ※ 注欄には、該当する本文の注を記した。

元号	西暦	盛政	盛明	盛政年表	典拠	注
永禄 9	1566	1		中庄地侍、三好盛喜(32歳)・新川又七娘の間に生まれる	(伝)	
10	1567	2				
11	1568	3				
12	1569	4				
元亀 1	1570	5		石山合戦始まる		
2	1571	6				
3	1572	7				
天正 1	1573	8		室町幕府滅亡(7月)		
2	1574	9				
3	1575	10				
4	1576	11		信長、石山本願寺攻撃(4月)		
5	1577	12		信長、紀州征伐、貝塚寺内攻撃、炎上(2月)		
				根来寺に入寺	(伝)	注5
6	1578	13				
7	1579	14				
8	1580	15		本願寺顕如・8月教如雑賀に退出(3月)		
9	1581	16		『法然上人絵伝詞書』を筆写、奥書に三十郎三慶の署名(6月25日)	(新 2-1~13)	注3
				このころ『難波草紙』(内閣文庫蔵) 記すか		注4
10	1582	17		本能寺の変(6月)		
11	1583	18		秀吉、柴田勝家を討つ(4月)		
				顕如・教如、鷲森から貝塚に移る(7月)		
12	1584	19		根来・雑賀衆岸和田・堺攻撃(3月)		
				根来寺の和泉国侵攻に参加。一番頭をあげる(伝では18歳)(3月~)	(伝)	注7・29
				戦功により根来寺修正院から壇波羅蜜寺知行一石を与えられる(11月)	(新 2-680)【1】	
13	1585	20		羽柴秀吉紀州攻めで根来・雑賀衆敗北(3月)		
				根来寺・粉河寺炎上。一向一揆勢力・根来寺衆は武装解除(3月23日)		
				太田城水攻めにより和泉・紀伊の戦は終結(4月)		
				顕如、天満に移動(5月)		
				秀吉、関白となる(7月)		
				秀長が紀泉両国に一国検地を命じる(閏8月)		
				羽柴秀長に召し出され、本領中庄で知行を得て約4年間にわたり出仕	(伝)	注9・33
				このころよりト半斎ら新川一門と連携、泉南地域に勢力を伸張する	(市史旧13)	注10
14	1586	21		秀吉、太政大臣になり、豊臣姓を賜う(12月)		
15	1587	22				
16	1588	23		父盛喜とともに中庄の土地集積を開始(11月~)	(新 2-706)他【2】	注10

元号	西暦	盛政	盛明	盛政年表	典拠	注
17	1589	24		根来寺修生院、盛喜と連名で大金剛院名跡を相続する(4月)	(新 2-681)他【3】	注11
18	1590	25		秀吉、小田原攻め、東北遠征、天下統一(7月)		
				『論語抄』(筑波大図書館蔵)書写(12月)	(近藝)	
				このころから足繁く堺に通い、清原家の儒教秘書や古典籍を書写し、勉学に勤しむ		注12
19	1591	26		秀長死後、貝塚寺内に身を寄せ、医学・禅学・連歌・歌道等をきわめる(1月)	(伝)	注35・36・37・38
				この前後、卜半齋の娘宗貞を娶る	(願泉寺文書)	注13
文禄 1	1592	27		文禄の役(1月)		
2	1593	28	1	嫡子新川盛明 誕生(幼名金十郎)	(近藝)	
				『古文孝経抄』(東洋文庫蔵)書写(3月)	(近藝)	
				『東山千句』(大阪天満宮蔵)書写(9月)	(近藝)	
3	1594	29	2	「中庄村検地帳」で村高の約二割の田地を盛政が所有する このころまでに父盛喜から中庄三善家当主を継承(8月8日)	(新 5-11-36)	注14
4	1595	30	3	小堀秀保没。小堀正次が和泉国瓦屋・中庄を拝領(4月)		
慶長 1	1596	31	4	京都大地震(閏1月)		
				父賀月道慶(盛喜)と大高寺玄普に阿弥陀如来日供を寄進(3月1日)	(新 掛軸1)【4】	注48
				三郎右衛門正好(佐野川新川家)が川出村高書上を作成、三十郎(盛政)宛で発給(11月1日)	(新 5-36)	注42
				このころ、新川姓に改姓し、佐野川新川家を惣領とする新川氏の一門化を遂げる		
				この年の末までに、豊臣秀長の重臣小堀正次に登用される	(伝)	
2	1597	32	5	慶長の役(1月)		
				宮内少輔に任官(1月10日)	(伝) (新 2-701)【5】	注15・43
				『日本書紀 神代巻』(国立国会図書館蔵)書写(6月)	(近藝)	
				三十郎名で慶長二年分御年貢麦払状が作成される。以降多くの中庄年貢納入帳面類が三十郎名で作成される(12月)	(新 5-6)	
3	1598	33	6	宗柳ら堺連中や父道慶等と玉津島神社参詣、蟻通大明神に法楽連歌・和歌を奉納(2月23日)	(新 1-73)【6】	注2
				秀吉没。朝鮮より撤兵(8月)		
4	1599	34	7			
5	1600	35	8	盛政・道慶ら、十五夜の月宴歌合(8月)	(新 1-183)【7】	注16
				小堀正次の下で関ヶ原の合戦で東軍として参陣する(9月15日)	(伝)	注16・41
				備中国後月郡の代官となり、任地に赴任(12月12日)	(伝) (新 2-662)【8】	注17
6	1601	36	9			
7	1602	37	10	新川正好(佐野川新川家)とともに近江国惣検地で検地下代となる(9月)	(新 5-58)【9】	注18
8	1603	38	11	江戸幕府開府(2月)		
9	1604	39	12	主君、小堀正次没。長男正一(遠州)が継ぐ。貝塚に帰郷(3月)	(伝)	注44
10	1605	40	13			
11	1606	41	14			
12	1607	42	15	卜半齋三男新川隼人の遺産分与の裁定に新川一門として参加、跡職処分状に連署する(5月15日)	(願泉寺文書)	

元号	西暦	盛政	盛明	盛政年表	典拠	注
13	1608	43	16	同年分中庄払状を作成。これ以前に改名して忠右衛門を名のる	(市史新6-III-1-4)	
14	1609	44	17	南宗寺の沢庵宗彭に参禅、「南容」の道号を与えられる。以降、連歌・和漢聯句等を通じた交友関係をもつ(7月)	(伝)(新掛軸2) (新 1-216、2-732) 【10】	注19・20
				佐野村支配に関わり片桐且元より下代候補に指名される(10月)	(佐治家文書8)	
15	1610	45	18	小堀政一代官として子息盛明・盛好や多賀盛勝など兄弟一族の総力をあげ佐野中庄惣鎮守大宮大明神を再興(閏8月)	(新 1-143)他【11】	注45
16	1611	46	19	駿府に下向し、家康に拜謁、紀行文「新川盛政駿河下向記」を記す(1~2月)	(新 1-215、 2-219)	注1
17	1612	47	20			
18	1613	48	21	小堀遠州様御知行分納方目録を忠右衛門名で作成(6月20日)	(市史新6-III-1-6)	
19	1614	49	22	紀州の浅野長晟、中庄に禁制を出す(10月24日)	(新 2-661)【12】	
				大坂冬の陣 中庄付近、大坂冬の陣の前哨戦で主戦場となる(11月)		
元和 1	1615	50	23	大坂夏の陣(5月)		
				慶長十八年分中庄払状を子息盛明が作成、これ以前に盛明に家督継承させて隠居(6月)	(市史新6-III-1-7)	
2	1616	51	24	末子盛好が12才で夭折、悲嘆のあまり三年目の春高野山で剃髪(3月)	(伝)、(配数事類 自序)	注21・50・ 51
				江月宗玩、瘡病	(欠伸稿訳注)	注36
3	1617	52	25			
4	1618	53	26	一時病床に伏して生死の境を彷徨い、辞世を詠む。沢庵が画賛を寄せる(7月9日)	(伝)(新掛軸3) (新 1-180)【13】	注20・22・ 54
				『配数事類』を著述する(12月)	配数事類 自序	注21・22
5	1619	54	27			
6	1620	55	28	沢庵宗彭、『配数事類』に序文を添える(10月)	配数事類 沢庵序	注52
				孫、新川盛里誕生		
7	1621	56	29			
8	1622	57	30	童病(瘡・おこり)にて死す(9月19日)	(伝)	注22
				沢庵宗彭、盛政の死にあたり賛を染筆する(10月24日)	(新掛軸4)【14】	注20・22・ 54
				父賀月道慶、88歳で没(11月15日)		
9	1623		31	盛政一周忌に沢庵が和歌、掲頌を手向ける(9月19日)	(東海和歌集、 語録拾遺)	
(中略)						
明暦 1	1655		63	※ 盛明は明暦元年63歳で没		

- 典拠【1】 根来寺修生院空知行宛行状
【2】 太五郎田地売券(新 2-706)、二郎五郎田地売券(新 2-717)、中庄堂主左近二郎田地売券(新 2-720)、中司助大郎田地売券(新 2-705)
【3】 根来寺大金剛院名跡譲請状案(新 2-681)、根来寺大金剛院名跡譲状(新 2-663)
【4】 三善盛政・同賀月道慶連署供米寄進状(新掛軸1)
【5】 後陽成天皇口宣案(新 2-701)
【6】 連歌・和歌会書留(新 1-73)
【7】 陪八月十五夜月宴歌合(新 1-183)
【8】 小堀正次判物(新 2-662)
【9】 近江国北小松村検地請状(新 5-58)
【10】 沢庵宗彭南容道号頌(新掛軸2)
【11】 中庄大宮大明神上座証文(新 1-143)、奈加美神社本殿建立棟札
【12】 浅野長晟禁制(新 2-661)
【13】 沢庵宗彭筆新川盛政画賛(新掛軸3)、新川盛政辞世(新 1-180)
【14】 沢庵宗彭筆新川盛政画賛(新掛軸4)